

令和4年5月30日 第531号 北区立じゅうじょうなかはら幼稚園 園長 髙沢 ゆみか

幼児期からの架け橋

先月、年間を通じて交流を重ねている学校サブファミリー各小学校の1年生担任の先生方と、上十条保育園の園長先生に本園にお集まりいただき、連絡協議会を行いました。この会は、毎年行っていたものですが、新型コロナウイルスの感染拡大により、3年ぶりの実施となりました。会では、和やかな雰囲気のもと、先生方が活発に意見を交換し合いました。例えば、幼稚園・保育園・小学校がいずれも取り組んでいるアサガオの栽培を例にして、幼稚園や保育園がどのように取り組み、その中でどのような経験をしているのか、小学校1年生の生活科ではどのように取り組んでいるのかなどを互いに具体的に話し、共通点や違いを共有したり、教材について情報交換をしたり、幼児期からの学びのつながりを確認したりしました。

また、1年生の様子や課題などについて、各校のお話もお聞きしました。各校とも、1年生は座るときの姿勢、給食の際の箸の使い方や食事の仕方などについて、特に丁寧な繰り返しの指導が必要であるとのことです。食事の際の姿勢や箸の使い方は、小学校以降の学習態度や筆記具の持ち方など、子どもの学習に必要な力にも直結する習慣です。そして、これらの力は個別に育つものではなく、生活の中で、身の回りのことを自分で行う習慣や排泄の自立などとともに、相互に関連し合いながら定着していきます。幼児期からの基本的な生活習慣の積み重ねの大切さを改めて強く感じています。同時に、これらの習慣を身に付けていくためには、ご家庭との連携も欠かせません。子どもたちの発達段階や一人一人の個性や特性に応じて、焦らず、根気よく、ご家庭と手を携えながら、改めて基本的な生活習慣の定着を丁寧に図ってまいりたいと思います。

今回の会では、小学校の先生方に、子どもたちが園生活で座っている椅子に実際に座っていただいたり、 園の施設を見ていただいたりもしました。その中で、園のトイレの水洗レバーが小学校よりもずっと軽いこ とが分かるなど、互いの指導に具体的に生かせる気付きもありました。

現在、文部科学省では、義務教育開始前後の5歳児から小学校1年生の2年間を、生涯にわたる学びや生活の基盤をつくる重要な時期として「架け橋期」と呼び、『幼保小の架け橋プログラム』策定に向けた審議が重ねられています。子どもの成長を切れ目なく支えるためには、幼児教育から小学校教育への円滑な接続をより一層意識し、発達段階や特性を踏まえながら、学びの連続性に配慮した教育内容や方法の工夫が求められます。近隣保育園や小中学校など、施設の類型や学校種を越えて教職員が気軽に話し合える、恵まれた"顔の見える関係"を大切にしながら、引き続き、子どもたちが「架け橋」を渡り、生涯自分を支える力の基礎を育んでまいります。

今月の指導のねらい

<ちゅうりっぷ組>

- 自分の好きな遊びを見付けて楽しみ、自分の思いや動きを十分に表す。
- 先生や同じ場にいる友達と関わる楽しさを感じる。
- 砂や水、空き箱など様々な物を使って、素材の面白さや見立てて遊ぶ楽しさを感じる。

<さくら組>

- ・ 興味がある遊びにじっくり取り組む中で、試したり工夫したりする楽しさを味わう。
- ・ 自分の思いや考えを友達に伝えたり、相手の話を聞いたりし、友達と関わって遊ぶことを楽しむ。
- 梅雨期の自然事象や身近な動植物の様子に興味や関心をもって関わる。